

第15講 論説・評論(1)―内容説明

演習問題A

解答

- 問一 ア
問二 オ
問三 ウ
問四 イ
問五 エ・オ(順不同)

解説

問一 第一～三段落の要点をおさえ、「軽やかな」が表す聴取態度を把握する。

従来の聴衆≠非日常的な空間(コンサートホール)で精神を集中させる聴

取態度

全体が統一された作品から作者の思想を読み取る「真面目」

な聴き方

←(新しいメディアの登場)

今日の聴衆≠日常生活の場で行う、散漫で表面的な環境体験

= 局所的な刺激断片の集合体と化した作品に感覚刺激を求める

聴き方

「軽やかな聴衆」

本文の導入部となるこの三段落では、音楽鑑賞の新旧二つのあり方が対比され、音楽鑑賞の場所・態度・聴き方に関してそれぞれの特徴が対照的に説明される。傍線部の「『軽やかな』聴衆」とは今日の新しい聴衆のことをいったもので、右の要点整理からわかるように、音楽を断片として扱い、表面的な感覚刺激を求める聴衆のことである。まさに「表層的な感覚刺激と戯れる」という、精神を集中させて聴く「真面目な」聴き方とは対照的な聴き方である。よって「軽やかな」を説明するキーワードとして、「感覚刺激」「断片」「日常生活」といった語が考えられる。

「軽やかな(軽やかだ)」は、輕輕と気持ちよく行うさま。直前の「表層的な感覚刺激と戯れる」様子をいつている。これをより具体化したのが「散漫で表

面的な環境体験」(第一段落)、「音楽を一つの環境として持ち歩く」「作品の一部をピックアップして繋ぎ合わせて聴く」(第二段落)などである。携帯用のCDプレーヤーを持ち歩いたり、パソコンや携帯電話を使って音楽をダウンロードしたりすることは、今や当たり前の行為である。よって「断片的に聴いたり」「時や場所を選ばず」などが決め手となってアが正解。

イ「軽妙と感じる曲」が誤り。「軽やかな」は聴取態度をいったものであって、音楽作品の特徴をいったものではない。なお、「BGMとして楽しむ」については、「表層的な環境体験」をいったもので認められる。

ウ「作者の思想を探して」「熱中して」が誤り。「軽やかな」とは対照的な「真面目」な聴き方にあたる。両者の聴き方を混同した説明となっている。

エ「日常の生活から逃避する」「集中的」が誤り。前者は本文に同内容の表現がなく、後者は「真面目」な聴き方に該当する。

オ「軽快な旋律」がイの「軽妙と感じる曲」と同じ理由で誤りになる。

問二 第四～九段落の論旨の展開をおさえる。

一九世紀に生み出された「作曲家神話」とその解体

← バッハ・モーツァルト・ベートーヴェンの各神話

← 「純粹鑑賞」が神話を生み出す

←

作品を聴きながら作者の人格や個性、作曲時の心情を感じ取る

作曲家神話が一九世紀の純粹鑑賞によって生み出されたこと、および純粹鑑賞とは作品を通して作者の精神を理解することであることが説明されている。すなわち、作曲家神話は作品の鑑賞を通して作者の個性・精神を聴き取ろうとする純粹鑑賞によって成立したのである。設問は、この作曲家神話について具体的な作曲家の事例をもとにした説明を示して、その成立過程が最も適当なものを選択させるものである。

ア 神話の成立事情の説明として誤りである。「眼光鋭い強そうな顔のイメージ」自体が「一九世紀後半以降に急速に普及した」神話にほかならない(第三段落)。

イ「ピリヤードをやりすぎて貧乏になった」という事実」は神話の解体として

説明されている。また、本文では「事実」ではなく「説」として紹介されている（第六段落）。「純化され」も誤り。

ウ アと同じく「眼光鋭く雄々しい」肖像画や彫像は神話そのものである。また、実際にそのような顔つきであったと説明している点も誤り。

エ バッハがライプツィヒにとどまったという事実から「神話」が生まれたとする成立の過程が誤り。また、「敬虔なルター派信者」は神話である。

オ 音楽の清澄な印象が、苦境の中でひたむきに作曲を続けたという神話を生み出したという説明で、――線②の説明として適当である。第六段落の内容とも合致する。

問三 第十～十四段落の要点をおさえる。

純粹鑑賞のパラドックス

作品から作者の個性・精神を理解する
作者を離れた作品それ自体に集中する

パラドックスの成立事情

作品を現実のコンテキストから切り離す
新たなコンテキストを纏わせる
作曲家神話の誕生

「パラドックス」は、一見誤りのように見えるが、実は一種の真理を言い表している説のこと。本文では――線③の前後で、作品の純粹鑑賞が作品を通して作者の精神や個性を理解することであると前提したうえで、純粹鑑賞は作品自体に集中することをも要求するという、前提とは矛盾した事柄が成り立つ様子を「パラドックス」と表現している。そして十一段落以下で、このような「パラドックス」が成立する過程をテキストとコンテキストの関係として説明している。正解はウで、この矛盾した二つの事柄をきちんと説明している。

ア 「ただ作品を表層的に受容する」が誤り。パラドックスの一面を説明していない。

イ 「作者とは切り離されたものとして受け入れる」がアと同じ理由で誤り。

エ 「作者が曲を作った時の状況を調べたうえで」が誤り。第十段落で、これは学者の役割だといわれている。

オ 「精神を集中する」ではなく「作品それ自体に集中する」とするべき。

問四 第十五段落以下の要点をおさえ、映像メディアが聴衆態度にどのような影響を与えているのかを把握する。

現代の聴衆は作曲家神話を生み出さないⅡ「脱神話化」の時代

映像メディアがテキストとコンテキストとの新たなかわりを生じさせる

映像Ⅱ「純粹鑑賞」によって生じる神話を除去する

強烈なイメージが音楽と結合して新たな神話を作り出す

第四～十四段落で近代における「作曲家神話」の形成と、現代におけるその脱神話が説明された後を受けて、第十五段落以下で、音楽における新たな神話の形成が説明されている。それには映像メディアがかわっているという。そこで――線④に着目すると、「テキストとコンテキストとの別の形のかかわり」とある。「テキスト」は作品すなわち演奏される音楽作品である。「コンテキスト」は注に「作品をとりまく状況や情報」とある。近代の「純粹鑑賞」にあつては「作品をもとに想像力によってイメージされた作曲家や作曲の状況」（第十三段落）、すなわち「作曲家神話」をいう。この「作曲家神話」は現代の「軽やかな」聴衆によって否定されたものの、映像メディアが強烈なイメージを武器に新たなコンテキストを生み出し、それが新たな神話の形成となるというのである。そして第十七段落以下その説明が展開される。特に最終段落の「映像のもつ圧倒的なインパクトと、その音楽との巧妙な結合によって引き起こされる強烈なイメージは、このようなコンテキスト（神話）を生み出すうえで絶大な効果を発揮する」に着眼して、映像と音楽との結合が新しい神話を生み出すという要点をおさえる。よって「映像のもたらすイメージが作品と結びつくことで新たな『神話』を生成させる」と説明したイが正解となる。アの「視覚的な情報の方が聴覚的な情報よりも強いイメージをもつ」、ウの「視覚的な要素を優位においた」、オの「現実の作曲家や演奏家の視覚的な情報を与える」は、いずれも神話の生成の理由説明として正しくない。

問五 選択肢を順に吟味する。

ア 近代の作曲家神話は解体されなければならないという立場に立った説明になっており、誤り。

イ 「音楽が一般の大衆へとひろがることになったと歓迎している」が誤り。

これら筆者の立場ではない。

ウ 近代の聴衆よりも現代の「軽やかな聴衆」の方を高く評価しているという

内容で、本文の内容に合致しない。

工 前半（「筆者は、……したうえで」は第九・十段落に、後半（「そのために」以下）は第十一〜十四段落に合致する。

オ 第十五段落以下の内容に合致する。

カ 「映像メディアが現代の音楽文化にもたらす変化はそれ以上に大きいと予想している」が誤り。内容的に漠然としていて、最終段落の趣旨に合致するとは言いがたい。